



みはら玉手箱



広報みはら「親子で学ぶみはら玉手箱」原稿作成うら話 1

平成25年度と26年度は、市民学芸員が順番に広報みはらの「親子で学ぶみはら玉手箱」欄の編集を担当しています。編集段階における苦労等、作成のうら話を紹介します。



1. 25年4月号

●国の天然記念物●

沼田西のエヒメアヤメ自生南限地帯

(イ) 平成21年度の「市民学芸員 I期生養成講座」において、エヒメアヤメの現地調査を体験しました。2月に雑草は刈取られたはずですが、あっという間にエヒメアヤメの何倍もの高さに伸びていました。渡された分布図を頼りに、草むらをかき分けかき分け、何とかエヒメアヤメの株を見つけて、参加者は、安堵し仲間と顔を見合せ喜んだものです。

(ロ) 昭和40(1965)年結成の地元沼田西の保存会は、毎年、2~3月の草刈りに始まり、4月花の数、6~7月果実の数、10~11月苗条の本数調査と年間を通じて活動されています。国の天然記念物をこよなく愛し、油断すると絶滅する可憐な花を、必死に守っておられる姿に、感服したものです。



〔雑草に埋もれたエヒメアヤメ〕

2. 25年7月号

●国の天然記念物● 久井の岩海

谷間に広がる巨大な石の群れ。土に埋もれることなく、埃のない綺麗な素肌が自然のままに保たれているのは、本当に不思議です。久井在住の岡田清孝氏(前三原市文化財保護審議委員)は、「岩群の下に、土を運び去る水の流れるから」と解説されています。水音峡で大きく聞こえるのは特殊現象で、その他のごろでも同じ現象が起こっているのかと半信半疑で現地調査したところ、一番広いぜにがめごろで、かすかな水の流れる音を確認した時は、驚きでした。

この発見を、アヤメちゃんにも教えてあげたかったのですが、紙面の制約があり割愛されたのは、残念でした。



水音を確認した
ぜにがめごろにて

3. 25年11月号

●近代日本彫金界の巨匠● 清水南山

ある市民学芸員の祖父は、清水南山と同じ幸崎に住み、生前不動産取引の仕事をしていました。南山さんが自身の土地を処分される際、その祖父がお手伝いされたそうです。南山さんが、東京から帰った折、途中で背広から平服に着替え、「そうで、ごあんす」などと幸崎弁で親しく話されている様子を目撃されたそうです。

近代日本彫金界の巨匠でありながら、少しも偉ぶることなく、腰の低い姿にその祖父は感動されたとのことでした。



〔清水南山〕

みはら おもしろクイズ



(解答はこの頁の最下段にあります)

浮城まつりの小早川甲冑部隊

浮城まつりの名物、甲冑部隊について考えてみる。
(写真はいずれも平成22年度の撮影)

1. 甲冑部隊のルート

平成25年度浮城まつりにおける甲冑部隊のルート
サン・シープラザ→隆景広場 (法要/口上)



うきしろサブステージ (口上)



船入橋跡 (口上)



マリンロード



港湾ビルステージ (口上)



サン・シープラザ

2. 甲冑部隊の歴史

早春の神明祭り、春のさつき祭り、夏のやっさ祭りに続く秋の祭りとして始まった浮城まつり。今年は10回目となり駅前の市民広場をはじめ各所で様々なイベントが催されました。

10年前にこの祭りが始まってから間もなく甲冑部隊が登場。安芸高田市吉田町から借用した甲冑を付けて、毛利三家の幟を持った市内の有志約50人が三原城下を練り歩くものです。

尚、駅前の市民広場に今年登場した毛利元就、毛利隆元、吉川元春の甲冑隊は、広島城で活躍する安芸ひろしま武将隊のメンバーであり、上記の甲冑部隊とは異なります。

3. クイズ

この甲冑部隊は毛利一族三家の幟を、持って行進します。写真と対応させてください。

- (1) 毛利家
- (2) 吉川家
- (3) 小早川家



〔隆景公の法要 — 隆景広場〕



〔法常寺さんの読経〕



〔甲冑部隊も焼香〕



〔マリンロードを行進〕



〔港湾ステージで口上〕



(ア)



(イ)



(ウ)

クイズの解答 (イ)(エ) (ア)(ウ) (イ) (ウ)

三原のお祭り



長谷神社例祭



刈り取りの終わった田んぼがのどかに広がる長谷の里、今年はいにくの曇天の中、10月20日に「長谷神社例祭」が賑やかに開催されました。この祭りは、毎年10月の第3日曜日に、小坂町、長谷町、沼田町、新倉町の人達によって執り行われています。

長谷神社の由緒について、『広島県神社誌』は、「豊前の国宇佐八幡宮より勧請のご神体、延徳3(1491)年9月糸崎にお着きになり、・・・(中略)・・・遂に長谷が峰の山を眺望して霊地なりとし、沼田下、荻路、小坂の三郷の者打ち集い、参道を造り御本社を建て、三郷の氏神として祭礼を行うことになった」と伝えています。また『芸藩通志』は、「八幡宮、小坂、荻路二村の界にあり。延徳3年勧請。大永2(1522)年稲村山城主、田坂頼賀が再造す」と記しています。



長谷神社



お供え物のされた神輿

祭りの段取りはその年の夏から始まり、実行委員が行事内容を取り決め、入念に準備を進めていきます。

祭り前日は、参道の掃除をおこない、幟を立て、境内に注連縄(しめなわ)を張り、その内へお供え物のされた神輿を据えます。この注連縄は春に予約し、秋の収穫が済んだら20人位で、青くねばいもち藁(わら)で、左捻りに作ります。年配者から教わりながら継承していかねばならない伝統的作業です。

15時30分から神幸祭が始まります。祝詞奏上(のりとそうじょう)の後、宮司さんが腰を折って(お辞儀をしながら)、低く長く大きな声で「オー」と発せられます。これは警蹕(けいひつ)といって、神霊が降りて神輿に宿られる時、人々が不敬な行為をしないように、畏み(かしこみ)と警戒を促す“先払い”の意味があります。

こうして一連の降神の儀が滞りなく執り行われ、神輿はそれぞれの郷(ごう)の御旅所へ渡り、一夜鎮座することになります。



御旅所に鎮座した神輿



おとな神輿



子ども神輿

翌例祭当日、午前中はおとなも子どもも神輿を担いで各々の町内を回ります。子ども神輿に随伴する軽トラックの拡声器からは“ワッショイワッショイ”という、元気な声が響き渡ります。



おとな神楽



子ども神楽

12時から社殿で祭典が行われ、宮司さんの祝詞奏上、御祓、玉串奉奠（たまぐしほうてん）に続いて神楽の奉納です。おとな神楽と子ども神楽があり、今年はおとなの番でした。回転しながら舞い、丸盆や大刀に盃を並べる演目は圧巻でした。

境内ではかき氷、綿菓子、焼きイカ、ジュース等の店が出て、参拝者で大いに賑わいました。

午後3時を過ぎ、全ての神輿は神社へ担ぎ上げられ、祭りは最高潮を迎えます。その後還幸祭（かんぎょうさい）が行われ、最後に紅白のお餅やお菓子が、参加した子ども達に配られます。

総代さんにお話を伺うと、おとな神輿は平成8(1996)年ころ、「おとなも神輿を担ごうや!」と、壊れた昔のケンカ神輿3体の部品を取り合わせ、1体を組み上げたことが始まりとか。また、子ども神輿3体は、昭和62(1987)年、氏子衆により奉納され、以来全員参加しているとのこと。そして、こうした行事に参加することで、世代を超えての交流が自然にでき、地域の伝統文化を未来に繋ぐことができるのだ、と話してくださいました。



賑わう境内



神社に戻った神輿

石碑が語る三原の歴史

今回は前号の続編として、糸崎木原地区をもう一度取り上げます。

神功皇后の古より朝野の崇敬を集めた糸碓神社を擁し、また風光明媚な景観は、多くの文化人を魅了してきました。近代、工業都市国際港として栄えた糸崎には幾重にも重なった歴史の層があります。消失した歴史の痕跡や伝承を紐解き整理していくことも楽しいことです。

道標



〔道標〕



〔鉢ヶ峯に至る参道〕

〔鉢ヶ峯の道標〕

前号で取り上げた、虚空蔵の道標から西へ 100m、赤石バス停から 10m、鉢ヶ峯の溪流、赤石川に沿って登る細い路地坂道の角に立っている道標です。〔鉢ヶ峯道 上野善五郎〕とあります。高さ 76cm で 幅、奥行きとも 19cm。密接した隣家の車庫の柱との間わずか数 cm。年代らしきものが刻まれているようですが、読めません。木原の観音寺の住職さんに伺うと、年代までは不明だが現当主上野さんの二代前、おじいさんにあたる人だそうで、おそらくは明治の頃、と教えてくださいました。この坂道を上がり踏切を渡るとそこからは風情あふれる石垣の間を貫けて登る鉢ヶ峯道です。

記念碑



〔碑裏〕

〔松濱新港之碑〕

糸崎七丁目松濱地区にある住吉神社境内に高さ192cmの立派な碑が立っています。この松濱新港は慶応元(1865)年に第十二代三原城主浅野忠英が、宇都宮龍山の建議により築造した港です。風雲急を告げる幕末、わずか1年という突貫工事で完成したものです。海の守護神として併設された住吉神社境内に明治19(1886)年にこの築港記念碑が建立されました。

題字は最後の広島藩主であった侯爵浅野長勲。碑文は縦書きにびっしりと書かれています。長い年月、潮風にさらされ年々判読が困難になっていますが、築港の経緯が書かれているようです。

碑裏には「発起者、寄付主、製作人」の見出しで名前が列挙されています。驚くべきは寄付主に尾道の豪商たちの名が連なり、その下に三原の豪商が名を連ねていることです。筆頭には後の広島銀行となった第六十六銀行の創始者橋本吉兵衛の名が刻まれています。

松濱港は糸崎御台場とともに、海防の港であったが、後に海運業者の港となり、尾道、三原の商人たちにとって重要な港であったことが窺えます。また、明治14(1881)年に造られた玉垣に彫られた寄進者には、石見、加賀、越前、越中、越後の商人、遠く北海道松前の商人の名もみえることから北前船の寄港地でもあり、当時の松濱の隆盛を窺い知ることができます。

(参考:「糸崎の石碑」 糸崎の自然と歴史を愛する会編)

句碑・詩

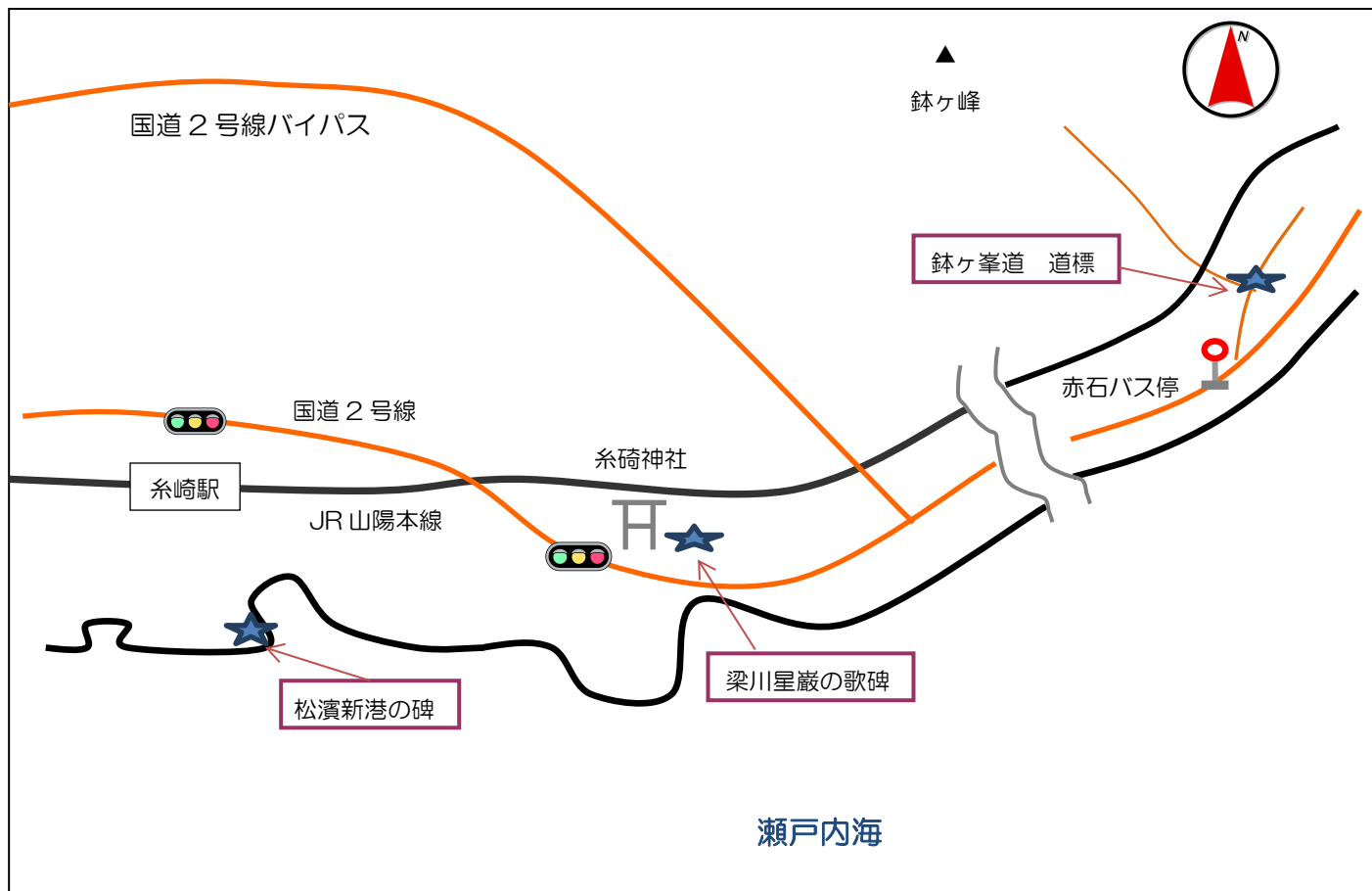


〔梁川星巖 双鷺洲の碑〕

糸碕神社前に立つ、高さ 300cm、横 180cm の歌碑。
 糸碕から望む小佐木島、佐木島の見事な美しさを詠んだ星巖の詩。
 幕末の詩人、梁川星巖は頼山陽と親交深く、諸国行脚し、頼杏坪、
 菅茶山など多くの文人墨客を訪ねています。その道すがらここ糸碕に
 立ち寄り、この景色を絶賛し、その後も幾度か、妻と共に訪れていま
 す。星巖は、後に憂国の志士に変身し、晩年は京にあって勤皇志士の精
 神的支柱となった人です。

裏面には、終戦間もない昭和 23(1948)年に、建立に至った篤い思
 いが刻み込まれています。

概略マップ





三原にある狛犬



今回は、宮沖・宗郷地区の狛犬を紹介します。

9. 宮島神社（巖島神社） 三原市宮沖1丁目

通称、宮島さんと呼ばれ、元禄13（1700）年に宮沖新開が完成した際、農民等の要望により、浅野忠義公が安芸巖島神社の分霊を勧請して建立したと伝わります。



(単位：cm)			
	高さ	幅	奥行
阿形	75	30	63
吽形	75	30	63
年代	昭和46（1971）年6月		
石工	不明		
石材	花崗岩		
型	お座り型		



10. 甚五郎神社 三原市宮沖2丁目

甚五郎松神社とも呼ばれ、江戸時代に干拓された宮沖新開の堤防工事で、何度も潮に流され困難を極めた折、甚五郎が人柱となり完遂させたという伝説があります。

写真の狛犬は昭和50年の再建ですが、神社は、干拓工事の犠牲者達の霊を弔うために、当時既に建立されていたであろうと言われております。



(単位：cm)			
	高さ	幅	奥行
阿形	63	43	23
吽形	63	43	23
年代	昭和50（1975）年9月		
石工	不明		
石材	花崗岩		
型	お座り型		



11. 宗郷宇佐八幡神社 三原市宗郷2丁目

田野浦小学校南方の山裾に鎮座し、宗郷地区を見下ろしています。

永禄年間1560年頃、登町（葉田）の正時神社から分霊されたと伝わります。



[鳥居前]

(単位：cm)			
	高さ	幅	奥行
阿形	100	38	70
吽形	100	38	70
年代	大正7（1918）年2月		
石工	尾道 新谷 真助		
石材	花崗岩		
型	玉乗り型		



[鳥居前]



[参道石段脇]

(単位：cm)			
	高さ	幅	奥行
阿形	60	25	50
吽形	60	25	50
年代	文政9（1826）年8月		
石工	不明		
石材	花崗岩		
型	お座り型		



[参道石段脇]